# ルイ、ド、ラ、ヴアレ、プツサンの生涯とその業績

名畑應順譯

## はしがき

去る昭和十三年の春、私は巴里の旅寓にあつて、ラ、ヴァレ、プッサンの訃を聞き、近年歐洲に於ける佛教學の巨匠が追々物故して、たとへ專攻の部門は異つても、佛教徒として彼の地に遊ぶものが、聊か寂寥を感ずるやうになつた際のことゝて、一入この碩學の死を惜まずにゐられなかつた。そして當時亞細亞學會の例會に於けるその追悼の催しに參會して、會長のペリオ氏が悲壯な調子で曩にレヴィを亡ひ、今又プッサンを喪ふといふ相踵ぐ東洋學界の不幸を述べ、深く哀悼されるのを聽いた印象が遺つてゐる。その後一日支那學者で近時その關心が主として支那日本の佛教に向つてゐるドミエヴィル氏を訪ふた時、プッサン氏を絶賞して、遇〻當時白耳義で發刊されてゐた『ル、フランボー(燈炬)』誌を示し、その中に載せられた佛文の「ルイ、ド、ラ、ヴァレ、プッサン」といふ一項を讀んで見よと奬められた。私はそれを借りて宿に歸り、佗しい室の中で字書を片手にしながら一讀して、大いに感動する所があつた。そこで私は早速これを譯して故國の知友にでも送らうかと思ひ、ドミエヴィル氏にその話をしたら、親切な氏は早速そのことをルーヴァンの原述者ラベ、ラモット氏に傳へられたらしい。ラモット氏から翻譯して貰ふことを非常に喜んで、拔刷まで同封して懇切な手紙をくれられた。然し私はその後滯佛中こ

れを譯して故國へ送る餘裕がなかつた。歸朝してからも、もうやがて二年近くなるが、拔刷も手紙もまたそのまゝ最近まで押入の中にしまひこんであつた。私は時折それを思出すと二氏の好意に對して相すまぬやうな氣がする。それで畠違ひではあり、柄にもないと思ひながらも、敢てこの譯稿を草することゝなつたのである。

『ル、フランボー』誌によれば、一九三八年三月八日に白耳義東方研究會がブリュッセルでプッサンの追憶會を開いた時、副會長のコムバ氏と故人の高弟ラモット氏とが一般會員にもよく了解される程度で彼に就いて講演した。この二氏の講演を纏めたものが「ルイ、ド、ラ、ヴァレプッサン」の題目で誌上に載せられたのである。今この譯には姑くその內容に從つて上掲の題名を選んだ。參考文書に關する注は既に原述者が隨處にこれを附し誌名など多く略號を用ひてゐるが、こゝには煩を避けて大部分の注を文末に取纏め、略號は具名を以つて示すことにした。

## コムバ

東洋學の空に輝いてゐる明星は消えて、我等の同志は大きな哀しみの裡にゐる。佛教哲學の長老は亡くなり、そして東方研究會は彼の權威で會を擁護してくれた會長を喪つた。

暫く以前からルイ、ド、ラ、ヴァレ、プッサンの健康は見込みを失つてゐた、然し我等は尙久しく彼を生存へさせ、彼に隨分懸念させた一九三八年に於ける東洋學者のこの會議を統理する彼を見られるやうな期待にはずんでゐた。

この期間、一九三七年五月十一日彼が統理した東方研究會會議の最後に、人は彼が創設したこの事業を繼續するのを見ようと希ひつゝも、彼は嚴肅な宿命の宣告を聞いて、我等に殆ど一つの告別の辭を送つたのであるというた。何分にも皆の彼を生存へさせたい希望は大きかつたので、これに對する我等の抗議は、そんな風には考へられないといふことを表明した。

彼は一つの稀な技倆を以つて我等の事業を統理したのである。

彼の無比なる博覽强記は如何なる問題を持つて來た時

にも、疎かにはしておかなかつた。そして最も良き性質の諧調と素養ある文人の上品さとを以つて論者に報いる技術を有つてゐた。

最も嚴正な學問を微妙な皮肉――固より極めて典雅な禮節に充ちてはゐるが――に混和させるのを聞くのは一つの愉快であつた。

非常に奮鬪的であつたので、彼は不思議な若さに止つてをり、そして最後の時まで彼が全生涯を捧げた所の佛典解釋のまだ活用されてゐない材料を纏めるのに精勵した。支那高等學術研究所は彼がスタニスラ、ジュリアン賞に値した權威を以つて出版を管理してゐたので、その材料をば彼に贈呈され、彼に取つて最後の喜びとなる一卷とすることに一決した。

全世界はこの純なる知性を賞讃した。佛陀の二千五百年忌を修行した日本は、彼が受け得るに適はしい最も高い佛教の功績を彼に與へて、その機會に打つた八つの金牌の一つを彼に授與した。

一つの命令的な義務は我等の間に彼が持つてゐた數多の友人たちの悲みを高調することに私を餘儀なくする。彼は時としては少し強く我等を押除けることが出來たとはいへ、それでも彼は我等が誰でも全幅の信頼を以つて相談することの出來る確かな一人の友ではあつたのである。彼の友情は最も說教じみたそして又最も稀な慈愛の形を取つて、數々その友人たちの面前をも憚らず表現された。

個人的に私は彼に多くを負うてゐる。即ち建築は彼をあまり熱中させはしなかつたが、彼はシッパの發展に關する私の仕事に關心を持つてゐた。そして彼がこの方面に寄與したノートは最大の價値を有するものである。彼の記憶は驚くべきであつた。一日私が大ビュルヌフのテキストを彼に持參した時、王室のストリッパの存在を證する爲に、かくの如き權威に論據を求め得ることを私は誇らしく思つてゐたのであるが、一瞬の思案の後、一つの參照を求めようとして、その圖書室に起つて、彼は私にいうた。お氣の毒だが、一度ビュルヌフは彼の翻譯の中に過誤を犯した。そして彼の過誤を證明したのはセナ

ールの大きな功勞であると。私はこのテキストのこの章句を引込めるより外に仕方がなかつた。

外の人にもどれだけ彼が同じ世話をしてくれたか知れない。それは彼の學生や弟子であつた凡ての人々が證明することが出來よう。

諸兄姉よ、私は我等の悲みを彼の一生の賞揚すべき伴侶であつたラ、ヴァレ、プッサン夫人のそれに附加へまいと思ふ。夫人には我等は深き弔慰の切情を呈する。

諸兄姉よ、この悲壯な哀悼の裡にあつて、私は諸氏にこの大なる死の思出に諸氏の念慮を集中して數分間の沈默を保たれんことを提言する。

諸兄姉よ、私は進んで我等の失つた會長と友とに就いてのみ諸氏に語るに力めた。

その師の學的業績を諸氏に語るのは、彼の後繼者となるであらう彼の最も輝ける學生ラベ、ラモット氏に屬する。

ラベ氏に語つて頂かう。

## ラベ、ラモット



ルイ、ド、ラ、ヴァレ、プッサンは佛蘭西人の父とモンジュ生れの白耳義人の母から、一八六九年一月一日にリエージュで生れた。彼は白耳義の學問を世に顯はした教授たち、即ち地質學者のシャルル、ド、ラ、ヴァレ、プッサン、數學者のフィリップ、ジルベール、法律著述家のフランシス、ド、モンジュ、文學者のレオン、ド、モンジュ、及び尙今日現存する數學者のシャルル、ド、ラ、ヴァレ、プッサン等の一家に屬してゐた。

彼はサンセルヴエー高等學院で華やかな古典學を修めた。そこで彼は特にショタナグポールの亡宣教師ペー、ボドソンや佛蘭西ジェシュイット派教徒のペー、アンジュ、デューランの影響を受けた。彼は希臘語の研究に熱中し、羅甸語の作文に卓越してゐた。古典科を終了して、一八八四年から一八八八年までリエージュ大學に四年を過した。そこで彼は最も偉大なる成績を以つて哲學と文學との凡ての免狀を贏ち得た。デルブフが彼に論理學の趣味を指示してゐる間に、ルイ、ロエルシュは彼に批判と言語學との嚴正な原理を教へた。

哲學と文學との學位を得たのは十九歳の時であつた。チヤールス、ライヤルの『亞細亞研究』を讀んで、彼は自身に印度學者としての使命の生じたことを感じた。彼はルーヴァンで最初の武者修行をした。そこでシヤルル、ド、アルレーと殊にフィリップ、コリネは彼に梵語、巴利語、及び古代波斯語の初歩と、又同時に比較言語學の原理と方法とを訓へた。二年足らずの間に彼はその先生たちを汲み盡しそれから彼の飽くことなき好學心に對する新しい資料を巴里に探求した。當時折よくも印度學の研究はソルボーヌ、及び高等研究學院で十全の發展を遂げてゐた。彼はそこでヴィクトル、アンリとシルヴァン、レヴィとの學生になり、又オウギュスト、ベルトとエミール、セナールとの同情を得た。ルイ、ド、ラ、ヴァレ、プッサン自身は極度に活氣があつて、風通しの良い學者たちの中心にゐた。そこでは凡ての觀念と凡ての學問とが常に生々とした沸騰に於いて衝突し反撥するやうに交流してゐた。一八九三年に彼は十九世紀の最大博學者の一人なるヘンリ、ケルンの學校に入るためライデンに移つた。ケルンは彼に伽陀語を教へた。梵語と巴利語とアヴエスタ語との知識を以つてルイ、ド、ラ、ヴァレ、プッサンは彼の事業に武裝してゐた。後年彼の興味が殆ど專ら佛教に移つた時、彼は西藏語と支那語との研究を餘儀なくされた。

一八九四年に白耳義の國籍を選んで、彼はガン大學教授に任命され、そこで彼は三十五年間希臘語と羅甸語との比較文法を教授した。即ち殆ど凡ての時間を彼自身の個人的な研究に自由に身を委ね得るやうな割に輕い授業ではあつた。唯一度だけ教職と大學の煩累とがこの研究家を容赦し放免した。大戰はこの授業を中絶させた。劍橋へ亡命して、彼は白耳義青年の爲に講義を創設し、圖書館の耆那教の寫本と印度廳の西藏文書とに目錄を作つた。一九一八年には彼は牛津で短期のヒバート講座を、そして倫敦でフォーロング講座を受持つた。

大戰後白耳義に歸つて、彼はガン大學を次第に遠ざかつて、ブリュッセルを彼の活動の中心とするやうになつた。一九二一年に彼は白耳義東方研究會を創立した。一

九二九年にはガン大學教授を辭任した。然しブリュッセルの高等研究學院と支那高等學術研究所とで幾分かの授業を繼續してゐた。一九三八年二月十八日その事業に疲れ果てゝ、彼はその事務机の前にいとも心確かに締切れた。

然しルイ、ド、ラ、ヴァレの動いたこの外的範圍は、彼の生活に就いても彼の人間に就いても何も我等に教へない。その敬服すべき夫人に看守られて、彼はブリュッセルのモリエール街の書室で、書籍と思索との裡に孤獨に生きた。四十七年間(一八九一年—一九三八年)午前七時半から正午まで、午後二時から七時半まで、この小柄であり神經質であつて、黒玉のやうな黒い髪と鷲のやうな烱眼とを具へた男は、最も難解なテキストを弄び、佛教思想の最も晦澁な定理で手品しながら、探究と發見との焦慮の裡で、東方の寫本に傾倒して日を送つた。即ちそれは「何等の場所を必要とせず、何等の物質的事物にも依存せず、その本質、或は本性は唯考へるといふことにある」(デカルト)といふ精神的人間である。

こゝでは彼の業績を詳しく述べるやうなことは出來ない。

ラ、ヴァレ、プッサンの事業の年次的記錄は、一八九一年から一九三三年までは『アリュムニ、ド、ラ、フォンダシオン、ユニヴェルシテール』誌(一九三三年、第四卷、第三號、一八一頁—一九五頁)の中で見られるだらう。巴里の『ビブリオグラフイー、ブディク』の次號はラ、ヴァレ、プッサンの全業績の回顧を收載するであらう。

單なる一册子ではその著述とその論文との名目を枚擧するにも足らない。全年代錄の外に彼の活動の一般概念を與へることで我等は滿足しよう。識見と方法とに於ける統一が勝れてゐるので、ルイ、ド、ラ、ヴァレ、プッサンの業績はこの種の敍述をするのには頗る適當してゐる。

一、我等がその死を悲む師匠は何よりも先づ佛教經典—それは哲學的典籍であるが—の刊行者であり、翻譯者であつた。彼は佛教教理の長い歷史を標示する凡ての重要文書を發見した。

一八九一年にルイ、ド、ラ、ヴァレが彼の個人的研究に著手した時、リス、デヴィヅの英國學派の事業とパリ、テキスト、ソサイティの出版とは巴利①の資料に於いて探求の餘地を少なからしめた。そこで彼が刊行を請合つた『マハーニデッサ』を除けば、彼が特に專心したのは北方佛教に於いてであり、梵語佛教に於いてであつた。彼はオウレル、スタインによつて土耳其斯坦で探索された梵文佛典の幾らかの斷片を發見して公刊した。②而も人が「理解し難いことにも熱中する」(ベルト)ことが出來るといふことを見そこなつた彼の舊師たちを驚かせて、彼は殊に後の佛教の論師たちの哲學的述作と組織的解義とに心惹かれて行つた。彼は③『阿毘達摩』と『毘婆娑』との長い抄本の漢文を翻譯した。

小乘の全教理及びそれに關聯するものは『倶舍』の中に包含されてゐる。漢譯と藏譯とを比較し、ヤソミトラの梵本註釋を分解して、ルイ、ド、ラ、ヴァレ、プッサンは④六卷の縮册でこの主著の註解附きの翻譯を世に送つた。全く彼の巨人的な偉大さに吃驚した西歐に始めて佛教が出現した。『倶舍』の出版は我等の研究に一つの記念すべき時代を劃する。卽ち安易なる推量、大膽なる假設、急遽なる比較はこの眞正なる文書の岩によつて碎かれた。「予は倶舍の人である」と一日ラ、ヴァレ先生は私にいつた。彼は虛無派や觀念派の大論師の論書を掘出して、大乘の歷史をも同樣に更新し、豐富にした。『⑤入菩提行』の翻譯とその註解の⑥刊行により、⑦註釋附きの『中論偈』の出版により、最後に⑧『掌珍論』の翻譯によつて、空の哲學の創始者龍樹、月稱、寂天、及び淸辨は「素朴で空想的な」(ルイ、ド、ラ、ヴァレ)我等の世界に一つの冷酷なる批判の教訓を繰返す爲に過去の物蔭から出て來た。

⑨『菩薩地』の詳しい分解と『二十頌』の西藏語からの翻譯—その原典は最も遲れて發見されたのであるが、—との如き近接作業の繼續の後に、ルイ、ド、ラ、ヴァレは佛教思辨の最後の歸著たる細の意識及び唯識の哲學、無著の觀念論に眞正面から突き當つて行つた。彼は⑩玄奘の『成唯識論』を支那語から翻譯した。それが觀念論に對する關係は宛も倶舍が小乘に對する關係である。

最後に、その青年時代に彼は頽廢佛敎のタントラ經典に興味を持つてゐた。人は『パンチヤクラマ』[11]及び『アディカルマプラディパ』[12]の出版に彼に負ふ所がある。

彼の同輩の言に、ルイ、ド、ラ、ヴァレは「泰西學者の第一列に位置し、且つ全極東に於いて無上の信望を享受した」(シルヴァン、レヴィ)といはれるのはこれらの事業によつてである。彼は如何に働いたことであらうか。梵文原典が保存された時には、彼は數々寫本を校合して、訂正され註解された出版を供給することだけで滿足した。稀にはそれを翻譯した。その代り若し梵本が失はれてゐたとすれば、彼は西藏と支那の譯經、卽ち西藏の甘珠兒と丹珠兒、漢譯藏經の全集に力を借りた。この二國語の中にそれが存在した時には、その翻譯を比較して、彼は內心に梵文原典に還元し、次に印度の專門語を注意深く守つて、その翻譯を確定した。故に彼の著述は半佛蘭西語、半梵語の翻譯の形式の下に現はれてゐて、門外漢に取つては入り難い亂調子であるが、然し專門家に取つては非常に便宜である。この方法によつて、彼はその翻譯が



釋義の方に向ふシチェルバツスキー、並にその前には佛蘭西の讀者が寧ろ當惑するやうな全部分の洗練された原語同等の佛蘭西語によつて、梵語の專門語を譯することに執心したシルヴァン、レヴィと明瞭に距たつてゐる。その翻譯が出來上ると、ルイ、ド、ラ、ヴァレは權威ある著作の引用文に對校し、類似のテキストによつて彼のテキストを說明するといふ時間のかゝる困難な仕事をした。彼の報告は絕えず敷衍されるので、彼の最後の著述は「頁の下に波立ち、テキストの中に當つて碎ける」(フィノー)、いはゞ考證の大洋の中に游泳してゐる。(未完)

① Pali Text Society, 1916, 535 pp.

② Journal of the Royal Asiatic Society 1911-1913

③ *Controverse du Temps et du pudgala dans le Vijñānakāya*, Etude Asiatic, I. 1925, p. 342-372

*Documents d'Abhidharma sur le, Nirvāṇa et les Asaṅskṛta*, Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, XXXX, 1939, p. 1-80

*Documents d'Abidharma sur la doctrine des refuges et le corps de l'Arhat*, Mélanges chinois et bouddhiques, I, 1931-32, p. 65-125

*Documents d'Abidharma sur la Controverse du temps et les vérités*, Mélanges chinois et bouddhiques, I, 1937, p. 1-188

(4) *Abhidharmakoça de Vasubandhu*, Paris, 1923-31, six vol., 1564 pp.

(5) Paris, 1907, 144 pp.

(6) Calcutta, 1901, 605 pp.

(7) Saint-petersbourg, 1907, 427 pp.; Muséon, 1907, 1910, 1911.

(8) *Joyau dans la main*, Mélanges chinois et bouddhiques, II, 1932-33, p. 68-146

(9) Muséon, 1905, 1906

(10) Paris, 1928, 2 vol. 432 pp.

(11) Louvain, 1896.

(12) *Bouddhisme Etudes et matériaux*, London. 1898, 417 pp.

47263